

# Tiara

**特集** 北海道公立大学法人 札幌医科大学附属病院

大学と病院が連携・協働し、期待する看護師を育成  
「看護キャリア支援センター」開設から3年目を迎えて

**特集** 社会医療法人 さいたま市民医療センター

チームで取り組む心電図モニターの安全管理  
院長直下の組織「MACT」活動

**特集** 日本赤十字社 足利赤十字病院

認定看護師を活用して職員全体の質向上につなげる  
情報共有と連携強化を目的に認定看護師会を組織

**レポート** 第5回日本感染管理ネットワーク学会学術集会



# チームで取り組む心電図モニターの安全管理 院長直下の組織「MACT」活動



社会医療法人  
さいたま市民医療センター

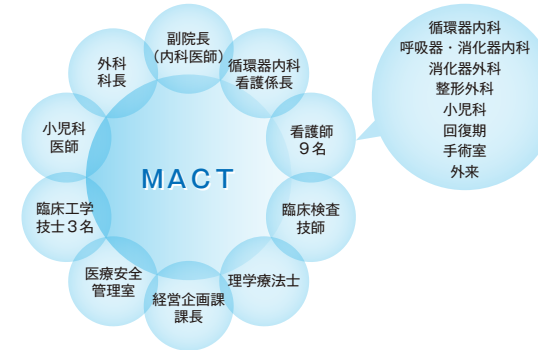
住所 〒331-0054 埼玉県さいたま市西区島根299-1  
電話 048-626-0011 (代)  
URL <http://www.scmc.or.jp/>  
病床数 340床 (回復期リハビリテーション病棟47床含む)  
診療科目 内科、小児科、外科 (一般外科、消化器外科、乳腺・内分泌外科)、脳神経外科、整形外科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、皮膚科、放射線科、病理診断科、麻酔科、リハビリテーション科



部署ラウンドでは、アラーム設定が適切かどうかなどを判断・確認しています。

社会医療法人  
さいたま市民医療センター  
(さいたま市西区)

心電図モニターのアラームに関連した医療事故報道が全国的に後を絶ちません。患者の命にかかわる事例も報告されており、その対策は急務となっています。さいたま市民医療センター (加計正文院長・340床) では、こうした問題を解決するため、院長直轄の多職種組織「さいたま市民モニターアラームコントロールチーム (さいたま市民MACT=Monitor Alarm Control Team)」を発足させて取り組んでいます。副院長でさいたま市民MACT委員長の石田岳史氏と、副委員長の富田晴樹 (看護部係長)、富永あや子 (臨床工学技士) 両氏にお話を伺いました。



MACTのメンバー構成



病棟内の随所に設置したマルチスレープモニターシステム。スタッフは病棟のどこにいても心電図モニターの確認が可能です。

## 鳴り続けるモニターアラームに麻痺

ナースステーションに鳴り続けるモニターアラーム。全国の病院で目にする光景です。同院でも、開院 (2009年) 後の4年間でこのモニターアラームに関連するアクシデントが4件あったといいます。「鳴り続けるモニターアラームに麻痺してしまい、モニターアラームが鳴っても何も感じなくなっていた」と、富田副委員長。

そのような状況の中、「モニターアラームが鳴り続けているのに、誰もモニターを見ないのはおかしい。きちんと管理すべき」と感じたのは、臨床工学技士の富永副委員長でした。装置・器械を正しく取り扱うのが専門である臨床工学技士の意見に、石田委員長、富田副委員長も賛同。12年4月にモニターを管理するためのワーキンググループが発足しました。その後、同年12月には、多職種で構成された「さいたま市民MACT (以下、MACT)」として発足し、病院を挙げて取り組む体制が整いました。「トップダウンで新しいことに取り組むのに、当院の規模は最適だった」(石田委員長) ことも、病院全体での取り組みに拍車をかけました。

MACTでは、①モニター管理状態を良好に維持する②アラームに機敏に対応できる環境の構築



石田岳史MACT委員長を中心に、看護師の富田晴樹氏 (左) と臨床工学技士の富永あや子氏

③心電図モニターに関する意識の向上などを目的として、(1)毎月1回の委員会開催(2)毎週の部署ラウンド実施(3)心電図および心電図モニターに関する勉強会開催(4)NEWS LETTERを毎月発行などを行っています。

## アラームの初期値やモニター中止基準も

それまで、循環器内科病棟で1日平均約1,500件あったモニターアラームを管理するため、MACTではまず、リスクの高い場合のみモニターアラームが鳴るように、初期値を定め、病態の変化に伴う設定変更は、毎朝の病棟モニターカンファレン

スで調整するようにしました。また、不必要なモニター装着はモニターアラーム数を増加させるため、「心電図モニター中止基準」も決めました。

石田委員長、富田・富永両副委員長らによる部署ラウンドでは、①アラーム設定が院内基準どおりか②適切な電極位置か③誘導 (I、II、III、N A S A、M C L 5、C C 5) は最適か④モニター装着は妥当かなどを判断・確認し、結果を病棟にフィードバックしています。特に、部署スタッフが心電図モニター装着の理由をラウンドメンバーにプレゼンテーションする場面では、部署スタッフが理路整然と説明している姿が印象的でした。

また、スタッフが病棟のどこにいても心電図モニターが確認できるように、マルチスレープモニターシステムを病棟内の随所に設置したことも特筆すべきことです。①確認のための業務負担を軽減できる②病棟にいる多職種の職員が情報を共有できる③異常波形出現時に全職員が速やかに対応できる④患者が自身の心拍を知ることで、アドヒアランスの向上が図れるなどの効果を上げています。

## MACTの取り組みを全国にも

これらの取り組みの結果、循環器内科病棟での1日平均モニターアラーム数を、150~200件まで減少させることができ、リスクの高いアラームには速やかに対応できるようになりました。さらに、モニターアラーム管理が院内スタッフ共通の認識となるなどの効果をもたらしています。

モニターアラーム管理をはじめて4年。この間の取り組みについて、石田委員長は「当院で成果を上げられたのは、MACTが委員会ではなく、院長直下の組織であること。とても活動しやすい組織です」と、組織体制を評価。また「モニターアラーム関連事故をなくすためにも、MACTの取り組みを全国の病院にも広げていきたいですね」(富田副委員長)、「この取り組みが全国のスタンダードになってほしい。また、当院でもこの取り組みを絶やさないように、私たちのあとに続く人材を育てていくことも必要です」(富永副委員長)と両副委員長は話しています。

(2016年6月1日さいたま市民医療センターにて)

## 著書「心電図教えてノート」が好評

MACTの委員長、副委員長が編集に携わった書籍「心電図教えてノート~チームでモニター事故を予防する!~」(著・富田晴樹、富永あや子、監修・石田岳史、出版・中外医学社)が好評です。心電図について、医師ではなく、看護師である富田氏と、臨床工学技士である富永氏が書き下ろした画期的な1冊。MACTが発足してから、現場の看護師が疑問に感じてMACTに「教えてほしい」と問い合わせのあった心電図波形を図説し、波形の読み方を解説しています。また、心電図もコンピュータグラフィックではなく、実際の波形を掲載。「この波形の場合、リスクが高いのか、高くないのか。看護師はどうすれば良いのか」などが分かりやすく示されています。心電図に苦手意識を持つ看護職に最適な書となっています。

B5判、98頁。2,200円+税。

